

第 17 回 日本認知症ケア学会大会 神戸 平成 28 年 6 月 4 日～5 日

多職種連携によって持効型インスリン導入に成功した脳血管性認知症の一事例
特に次男の協力が多大であった

稲山靖弘（聖志会 渡辺病院）、

中村奈穂、南由加利、富田真友子、藤井亜弥、前田悦嗣

（のばな訪問看護ステーション）、（つばき薬局）

【はじめに】昨今糖尿病治療において早期からインスリン導入が勧められており、持効型インスリン製剤の導入にて、一日一回のインスリンの自己注射が可能になった。今回、ご家族、看護師、薬剤師、介護支援専門員の協力を得て、経口薬による血糖コントロールが不良であったがインスリン製剤導入に変更に成功した認知症高齢者の一事例を若干の考察を加えて報告する。

【倫理的配慮】個人情報取り扱いに注意し、本人、ご家族に発表の趣旨を説明し同意を得た

【事例】A さん、70 歳代、脳血管性認知症、糖尿病、HDS-R16 点、要介護 2。早朝より勤めに出る次男と本人、妻の三人家族であった。糖尿病は近医にてコントロールされていたが、HbA1c は、9.4% FBS は 220mg/dl 前後であった。

【経過】当院物忘れ外来受診後、認知症と糖尿病のコントロールを希望された。運動療法、栄養療法、経口糖尿病薬のみでは困難と考えインスリンの導入を考えた。薬剤師により、次男によるインスリンの自己注射を指導した。次に訪問看護師による自宅での血糖の管理指導を依頼し、また週 5 日のデイサービスを組み込んだ。A さんは、早朝 6 時、次男の出勤前に血糖測定とインスリン注射を行ってもらい、その後 9 時 30 分からデイサービスをうけ、夕方に次男が勤務終了後に自宅に帰った。出張にて次男が不在の場合は、訪問看護師によってインスリン注射を施行した。現在まで低血糖となることもなく、ランタス 6 単位にて、HbA1c は、7.1% FBS は 130mg/dl 前後となっている。

【考察】数年前であれば、核家族の認知症高齢者のインスリン治療を外来で導入することなど困難であった。しかしながら、持時効型インスリン製剤、訪問看護制度、デイサービス、ご家族の在宅医療への理解のおかげで、コントロール不良であった糖尿病をもつ認知症高齢者へのインスリン製剤の自己注射導入に成功し多職種連携の重要性を実感した。